審査の結果の要旨

論文提出者氏名　高　裕善

論文題目　　都市空間における「個人の場所」に関する研究

本論文は、都市を積極的に利用している人々の都市の中での「個人の場所」に焦点を当て、人々の個人の過ごし方から現在の都市施設、街並、外部空間と人々との関わりを明らかにすることを目的としている。

人の生活において人とのコミュニケーションが大変重要であると同時に「ひとりの時間」も大変重要であり、それを支えている都市空間は大きな役割を担っている。人々にとって環境を使いこなすことが必要である。このような背景から、人間に働きかける環境の価値を明らかにするには都市の実際の使われ方をとらえていく必要があると考えた。

第１章では研究の背景、目的、方法、既往研究の考察、研究の位置づけをした。

第２章では、アンケート調査により、人々が少なくとも１ヶ所は「個人の場所」を持ち、それは「居住施設」、「商業施設」、「自然」、「交通機関」、「文化施設」、「街並」に分類でき、多くの人が「屋外空間」、「商業施設」を自分の場所として利用し、人々が個人空間を確保したいときは「休」、「知」、「遊」の場合に大きく分かれ、全ての年代で「休」の場合が最も多いことを明らかにした。

第３章ではアンケート調査により人々の実際の過ごし方を考察した。「自分の場所-都市空間で人々が個人の好みにより、よく利用する場所」を確保する際の場所の「占め方」は、滞在が基本となる『点型』と、移動が基本となる『線型』に分類できた。点型は一点型（同一性格の空間に対して「自分の場所」が１ヶ所）とドット型（「自分の場所」として複数）に、線型は単線型（同一性格の空間に対して「自分の場所」が１ヶ所）と複線型（「自分の場所」が複数）に分類できた。各年代において『点型』が最も多く見られたが、必ずしもひとりに対して一つだけではなく、複数のパターンが混在している場合もみられた。

「自分の場所」での行動は、積極的に都市に参加している「参加型」、積極的に都市に混ざる事をさけている「観察型」、自分の事に集中している「没頭型」の３タイプに分類できた。このうち、各年代で「没頭型」が最も多く見られた。「観察型」の場合は、人を見る場合と、風景・景色を見る場合が見られた。中でも人を見る場合は、都市の中で大勢の人の中にまぎれ、自分は都市の一部として「観察」しやすくなる、都市の特徴の一つである「匿名性」が多く関係していると考えられる。「参加型」の場合、年代別には30代で最も多く、買い物・ショッピングなどの消費行為が目立った。この場合、都市空間の中を直接歩く事で「ひとりの空間」を認識している。ここでは「個人の場所」が滞在だけでなく、移動する事によっても成立している。「没頭型」では、人々が自らの意図を表現する為に行なう様々な表出は、常に周りの物や状況を使い分け、それぞれの「ひとり」を組織し、同時に他者の「ひとり」を読み取っているということを明らかにした。

第４章では、各場所を物理的な遮断度と移動可能程度により９つに分類し、それぞれの場所に関して、特徴・

理由・行動と席について考察した。「観察型」の場合には窓際を好む傾向が、「没頭型」の場合には人の気配、視線があまり気にならない席・場所を好む傾向が見られた。また、「ひとり」を楽しんでいる人達にとっては、利用している各都市施設は、本来持っている機能面よりもむしろ自分が関わりたい型の媒体となることで選ばれている場合が多いことも分かった。特にスーパーマーケットは品物を選ぶ楽しさ＋実用性があり、主婦層で多く利用されている。　また、ごく少ない場合ではあったが、「自分の場所」にいるが、誰かとの会話を求めたり、他人を意識し、目立つ事を望み、場所を確保している場合も見られた。この場合「ひとり」を維持したいか否かは、席を含めた自分の周りの環境の決め方で異なってくることも考えられた。

第５章では、都市の中で「自分の場所」を持ち続けている場合をケーススタディーを通して考察した。

第６章では、都市における人々の「自分の場所」を確保するための一連の流れをまとめるとともに、これからの可能性について述べた。人々は「ひとり」の空間を確保したい場合、物理的に遮断され、人の気配を感じられない空間よりは、様々な人・場所・情報がある場所を選択している。その際に、人々が利用する場所には「ひとり」になりやすい場所があり、そうした場所に「ひとり」を楽しむための人々が集まってきている構造も明確になった。そこには、人々が「ひとり」になりたいと思う多くの場合、ある程度の安全が確保され、親しみがあり、アクセスしやすい場所に居る事で、「ひとり」を楽しむことができる構造が重要とされていた。またそうした役割を持った空間が都市の様々な場所で存在していることも分かった。その中では停滞だけでなく、移動の状態のように刻々と変化する空間の中でも「ひとり」の認識が成り立ち、目に見えるあらゆる被写体は環境として人との関わりを持っている。また、多数の人が都市に出る事により、安らぎ、癒し、落ちつきを覚え、自分を定位し、「自分の場所」を確保していることも分かった。人々は日常生活のなかで「ひとり」で気楽になれる空間を探し求め続けており、その空間は人それぞれの好み、気分により絶えず変化し、その要求に応じてくれる都市空間が存在している。都市の中で「個人の場所」の需要がある以上、当然ながら新しい「個人の場所」の出現の可能性、もしくは、既存の「個人の場所」に対して新しい価値が生じる可能性があると考えられることが示された。

本論文は、都市を積極的に利用している人々の、都市の中での「個人の場所」に注目し、都市施設、街並、外部空間と人々との多様な関わりを明らかにした。

以上のように本論文は、人々の個人の場所という人間の本音の環境行動に基づいて建築・都市空間をとらえる建築計画学的な人間-環境系の解釈の一つの方法を提示し、建築計画学の発展に大いなる寄与を行うものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。